幼児の遊びに働く認知機能の条件分析的研究（その二）

表 2 用途テストにおける非標準的反応の出現率

<table>
<thead>
<tr>
<th>群</th>
<th>第1回用途テスト</th>
<th>第2回用途テスト</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>遊び群</td>
<td>97.8% (90)</td>
<td>98.0% (97)</td>
</tr>
<tr>
<td>模倣群</td>
<td>70.8% (64)</td>
<td>80.0% (92)</td>
</tr>
<tr>
<td>コントロール群</td>
<td>83.6% (83)</td>
<td>93.6% (117)</td>
</tr>
</tbody>
</table>
修正に、2（用途テスト）、1（二回）×3（遊ぶ、模倣、コントロール群）×3（紙タオル、マッチ箱、クリップ）の各要因間の相関分析を行なった結果、用途テストの主効果（F=26.67, df=2/27）が1%で有意であり、また、条件群×用途テストの相互作用（F=8.67, df=6/67）が1%で有意であった。さらに、条件群×用途テスト×条件群×対象の二次の相互作用（F=3.0, df=6/67）も1%で有意であった。このことから、表2における結果、各条件群ごとに非標準反応の平均値についての男女差をみると、一回目の用途テストにおいて、条件群間の反応数に差異のあることからも知識的には、第二回目の用途テストにおいて、他の条件群に比べて変化がないことも認められた。

図2は各条件群ごとに各用途テストの反応数の推移をみたものである。これからもわかるように、第二回目の用途テストにおいて、各条件群の反応数は変化する。なお、図2は各条件群ごとに各用途テストの反応数の推移を示している。
### 案 3 非編者混合の平均反応数の男女比較

<table>
<thead>
<tr>
<th></th>
<th>用途テスト</th>
<th>返信者</th>
<th>性別</th>
<th>男児</th>
<th>女児</th>
<th>男児</th>
<th>女児</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1 回</td>
<td>9.4</td>
<td>7.6</td>
<td>5.2</td>
<td>9.4</td>
<td>8.6</td>
<td>9.2</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2 回</td>
<td>13.8</td>
<td>7.6</td>
<td>10.8</td>
<td>8.2</td>
<td>11.2</td>
<td>8.6</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>N = 9</td>
<td>0.6</td>
<td>0.6</td>
<td>0.8</td>
<td>0.4</td>
<td>0.8</td>
<td>1.0</td>
<td>0.2</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>-----</td>
<td>-----</td>
<td>-----</td>
<td>-----</td>
<td>-----</td>
<td>-----</td>
<td>-----</td>
</tr>
<tr>
<td>N = 6</td>
<td>1.0</td>
<td>0.4</td>
<td>0.2</td>
<td>0.4</td>
<td>0.8</td>
<td>1.0</td>
<td>0.6</td>
</tr>
<tr>
<td>N = 5</td>
<td>0.6</td>
<td>0.4</td>
<td>0.8</td>
<td>0.2</td>
<td>0.4</td>
<td>0.8</td>
<td>0.8</td>
</tr>
</tbody>
</table>

（注）10は5回中5回2つ以上の対象を操作したことなどを示す。


